

【2026年8月号】パブリックヒストリー研究会 Newsletter

パブリックヒストリー研究会 Newsletter (2026年8月号) をお届けします。

■ 配信方針（ご案内）

2025年11月より、約4ヶ月に1回を目安にNewsletterを配信しております。研究会の活動報告、関連イベント情報、国内外の研究・実践の紹介などをお届けします。こちらNewsletterのPDF版は研究会HPにも掲載しています。

▶ 要旨一覧・資料リンク：<https://public-history9.webnode.jp/newsletter/>

■ 今号の内容：武蔵大学 書評会のご紹介

2026年6月6日(土)、武蔵大学にて、「書評会：小森真樹『歴史修正ミュージアム』（太田出版、2025年）を読む」が行われた。パブリックヒストリー、歴史認識、展示実践、記憶の政治といった観点から、本書の意義と論点を検討した。今号は、書評会当日の小森氏による本書の解題、評者2名によるコメント、それに対する小森氏のリプライと、全体討論の概要を掲載いたします。

小森真樹氏による『歴史修正ミュージアム』解題

「歴史修正主義 (historical revisionism)」という言葉は、過去の加害を否定し、植民地主義や戦争責任を矮小化する行為と結びついて批判的に語られることが多い。ホロコースト否定論や従軍慰安婦問題への反発など、いわゆる「歴史否定論 (denialism/negationism)」と同義に用いられることも少なくない。

けれども、修正という行為そのものが問題なのではない。本来、「歴史を修正する」という行為そのものは、学問の根幹にあるべき営みである。新たな史料や証言が発見され、視点が拡張されるたびに、歴史はより多層的なものとして描き直されていく。そのような修正こそが、真に誠実な歴史実践である。

同時にそれは、支配的な歴史記述に対して異議を申し立て、排除された声や視点を取り戻すための、極めて倫理的な知的・政治的实践でもありうる。むしろ、誠実で批判的な歴史研究とは、そのような修正によってこそ成り立っているはずなのだ。

だとすれば、いま求められているのは、事実や証拠に即しつつも、抑圧されてきた経験に光を当てるような、「誠実な修正」の技法ではないだろうか。歴史とは、過去にあったことの「ありのままの記録」ではなく、現在の視点からその過去をどのように「語り直すか」という営みである。その語り直しの手つきをめぐって、いま、真っ向から対立が起きているのだから。

ゆえに、私たちは「修正する」という行為についてもう一度捉えなおさなければならない。いわば、修正観の「修正」である。誰が、どの立場から、何のために修正するのか——その問いを避けることなく引き受けることが、いま切実に求められている。

本書「はじめに」より抜粋

書評会当日、小森真樹氏はまず自身の研究・実践活動と『歴史修正ミュージアム』との関係について説明した。本書は一般向けに書かれたものであるが、そこで提示した「歴史修正」

という概念を今後、歴史学を含む学術的な議論としても発展させていきたいと述べ、パブリックヒストリーを研究する参加者との意見交換への期待を示した。

小森氏の専門は、アメリカ合衆国を主な対象とする文化研究とミュージアム研究である。同時に、大学で研究・教育に従事するだけでなく、アートプロジェクトやオルタナティブ・スペース、展覧会の企画などを通じて、キュレーターとしても活動してきた。近年では、美術大学ではない大学において展覧会を制作する試みを継続しており、研究によって得られた知見や美術作品を展示という形で社会に開く実践を行っている。その一例として紹介されたのが、現代美術家・藤井光による〈日本の戦争美術1946〉をもとにした展覧会である。同作品は、第二次世界大戦後の1946年にGHQ関係者を対象として開かれた、いわゆる「戦争（記録）画」の展示を題材とし、美術史のなかで一時忘却されていた出来事を現代美術の形式によって語り直す試みであった。小森氏はその作品を購入し、自ら展覧会を企画することで、作家とは異なる主体として作品と歴史を引き取り、さらに別の公共へと広げようとしたという。こうした活動は、歴史を誰が語るのかという「主語」を広げ、立場や主体を変えながら歴史を社会へと開いていく実践であり、小森氏はこれをパブリックヒストリーにおける「doing history」とも接続しうるものとして位置づけた。

『歴史修正ミュージアム』そのものは、2024年度の約11か月に及ぶサバティカルを大きな契機としている。小森氏はロンドンとフィラデルフィアを主要な拠点とし、ヨーロッパとアメリカ各地のミュージアムを訪問した。ロンドンではウェルカム・コレクションを拠点として、医学博物館における人体倫理や、帝国主義・植民地主義の歴史にミュージアムがどのように向き合うことができるのかを研究した。他方アメリカでは、選挙や政治集会などにおけるフィールドワークも行いながら、文化的な視点から政治を観察するとともに、多種多様なミュージアムを訪ね歩いた。結果として訪問先は約45都市、500展示以上に及んだという。特徴的なのは、美術館、歴史博物館、自然史博物館といったジャンルを限定せず、ミュージアムという制度と実践の全体像を見ることを重視した点である。本書は、そうした2024年の現地調査を基礎として執筆された。連載形式で発表された文章の多くは、実際の展示室や訪問直後の記憶のなかで書かれたものであり、その場で展示を経験した際の感覚を残した点にも本書の特徴がある。

本書は、主として欧米のミュージアムを対象に、「国」「人種」「性」「階級」という四つのテーマから展示実践を論じ、最後に「みんなで修正する」という章へ至る構成を取る。第一章では、ミュージアムが歴史的に国民国家を形成・強化する装置として機能してきたことを踏まえ、現在の展示がそのナショナルな枠組みをどのように問い直しているのかを扱う。続く章では、人種・エスニシティ、セクシュアリティ・ジェンダー、階級をめぐる、それぞれ従来の展示や社会的な可視性のあり方を「修正」しようとする実践が検討される。そして最終章で掲げられる「みんなで修正する」という言葉について、小森氏は「みんな」を公共性の問題として捉えていると説明した。社会の分断が顕在化し、従来の「われわれ」という連帯が弱まるなかで、いかに公共性を再構築できるのか。あるいは、一つの「みんな」へ統合するのではなく、複数の「みんな」が存在することを認めながら、それらはいかに共存できるのか。本書の第五章は、そうした公共性やアイデンティティをめぐる問いを、具体的なミュージアムの実践を通して考えるものである。

小森氏は最後に、本書が抽象的な理論書となることを意図したものではなく、2024年という現在において、実際のミュージアムが社会的・政治的な課題にどのように応答しているのかを、展示の現場から考えた本であることを強調した。また、旅のエッセイとして一般の読者にも届く文体を選んだこと自体も、知をいかに公共へ届けるかというパブリックヒストリー的な実践の一部であると位置づけた。したがって『歴史修正ミュージアム』は、ミュージアムにおける「修正」の事例を紹介するだけでなく、誰が歴史を語り、誰とともに歴史を作り直していくのかという問いを、書くことと展示することの双方から提示する試みとして理解することができるのだという。

徳原拓哉「『歴史修正』を公共性の問いとして読む——東アジアのパブリックヒストリーから」

徳原拓哉は、高校で歴史教育に携わりながらパブリックヒストリーを研究する立場から、とりわけ現在取り組んでいる東アジアのパブリックヒストリー研究との関連で本書を論じた。小森氏の議論が主としてイギリスやアメリカのミュージアムを対象としていることを踏まえ、まず本書全体をどのように読んだのかを整理したうえで、台湾の事例と対照させることで、いくつかの問いを提示した。

徳原が最初に注目したのは、「歴史修正」という言葉そのものがもつ緊張である。歴史教育の現場では、「歴史修正主義」は過去の加害や暴力を否認し、都合のよい国民的物語へと過去を書き換える態度と強く結びついている。そのため、本書の題名にある「歴史修正」にも当初は身構えながら向き合ったという。しかし本書が試みているのは、まさにそうした言葉をめぐる意味のヘゲモニーを問い直すことである。歴史を「修正する」ことを否定主義から切り離し、これまで不可視化されてきた人々、記憶、場所、身体、階級などを公共空間に再配置する実践として捉え直す。徳原は本書を、「修正」という言葉を排除や否認のための実践から、公共性を開き直す実践へと取り戻そうとする試みとして読んだ。またその意味では、小森氏がこの本を出版すること自体も、一つのアクティビズムとして理解できるのではないかと指摘した。

ここでいう「修正」は、展示内容をより正確に訂正することだけを意味しない。誰の経験が歴史として認められるのか、誰の声が公共空間において可視化されるのか、どの身体・場所・記憶が展示に値するものとして承認されるのか——そうした公共性の線引きそのものを引き直すことが、本書を貫く「修正」なのではないかと徳原は整理した。この観点から見ると、各章は共通する問いによってつながっている。第一章のナショナル・ヒストリーをめぐる展示では、従来の国家の歴史に誰が可視化され、誰がその外部に置かれてきたのかが問われる。第二章では、植民地主義や奴隷制をめぐる展示を通じて、所有や発話の権利だけでなく、鑑賞者をあえて「不快にさせる」ことによって、見る者自身の位置を不安定化させるキュレーションの可能性が示される。第三章のクイアやセックスワークをめぐる展示では、過去の表象を変えることが現在の社会的なまなざしそのものを修正する可能性をもつ一方、その可視化が観光や消費の回路にも組み込まれうるという緊張が現れる。第四章では、文化資本や階級の問題から、何を展示するかだけでなく、そもそもミュージアムという空間に誰がアクセスできるのかが問い直される。

こうした第一章から第四章を受けて、第五章の「みんなで修正する」は本書の一つの到達点として位置づけられる。歴史を修正する主体を専門家や博物館だけに限定せず、地域の人々、当事者、鑑賞者、市民へと開いていく。それは、歴史を作る主体そのものを問い直すという意味で、パブリックヒストリーと本書が最も直接に交差する地点でもある。しかし徳原は、ここからさらに「みんなで修正する」ことを問い直す必要があるとした。その手がかりとして提示したのが台湾の事例である。西洋のパブリックヒストリーでは、「public」を国家的権力から切り離し、人々の歴史実践として捉えようとする傾向がある。これに対して東アジアを見ると、パブリックな歴史実践とナショナルな歴史形成が必ずしも対立するとは限らない。

台湾では、民主化の過程で村の歴史、ローカルな記憶、先住民の歴史を掘り起こすことがパブリックヒストリーの実践として展開されると同時に、それらが「モザイク台湾」という新たな台湾のナショナル・アイデンティティを構築する運動とも結びついていった。国立の歴史博物館においても、村の人々の聞き書きや複数の地域の記憶を展示することが、結果として新たなナショナル・ヒストリーを作ることへと接続している。ここではパブリックヒストリーとナショナル・ヒストリーは対抗するのではなく、重なり合う。

したがってミュージアムとは、抑圧されてきた声を単純に回復する場所だけではない。どの記憶を並べ、どの痛みを強調し、どの対立を和らげるのかを調整する制度でもあ

る。国家、自治体、大学、文化政策、資金、観光、教育、そしてキュレーターという専門職から完全に独立した空間ではない以上、「みんなで修正する」とときには、誰が参加するのかだけでなく、誰が参加できる条件を誰が設計しているのかを問う必要がある。

以上から徳原は、小森氏に三つの問いを提示した。第一に、「みんなで修正する」という実践は国家や公共制度の外部から既存の歴史を攪乱するものなのか、それとも国立博物館や文化政策などの制度内部からナショナル・ヒストリーを作り直す実践としても理解できるのか。第二に、不可視化されてきた人々や記憶を公共空間へ回復することが、新たなナショナル・ナラティブへの包摂ともなりうる時、どこまでが公共性を開く修正で、どこからが新たな統合や線引きとなるのか。第三に、歴史修正を肯定的に捉えるなら、それを可能にする制度・文化政策・専門職はいかに設計されうるのか、という問いである。

こうして本書の「みんなで修正する」という理念は、単に専門家以外の人々にも歴史への参加を認めるという意味にはとどまらない。誰が「みんな」に含まれるのか、誰がその場を設計し、最終的にどの記憶を展示するのかという線引きそのものを、不断に問い直す実践として理解できるのではないか。徳原は、本書を歴史否定主義に抗する議論であると同時に、私たちは歴史をいかに公共的に作り直すことができるのかを問いかける、実践的な書物として位置づけた。

小牧幸代「誰にとっての『歴史修正』か——南アジア・ムスリム研究とミュージアム実践から」

小牧幸代氏は、文化人類学を専門とし、インド・パキスタンにおけるイスラーム文化とムスリム社会、さらにヨーロッパのパキスタン系ムスリム移民を研究してきた立場から本書を論じた。自身はミュージアム研究やヨーロッパ研究の専門家ではないとしながらも、本書を手に取る契機となった二つの展示経験をもとに、歴史修正とキュレーションをめぐる問いを提示した。

第一の事例は、2017年にインド北西部アムリトサルに開館した分離独立博物館（Partition Museum）である。同館は1947年のインド・パキスタン分離独立70周年に開館した民間のミュージアムであり、実物資料や写真、新聞記事に加えて、分離独立を経験した人々とその家族によるオーラル・ヒストリー、映像、アート、インスタレーションなどを組み合わせている。来館者自身が展示制作に参加する仕掛けもあり、五感を通じて歴史を経験させるという点で、小牧氏はこれを本書が論じる「テンプルからフォーラムへ」という近年のミュージアム実践を体現する事例として紹介した。なかでも同館は、従来の分離独立史では十分に語られてこなかった女性の経験を積極的に可視化している。レイプ、誘拐、名誉殺人などを経験した女性たちの声を取り上げる展示は、まさに沈黙して／させられてきた経験に光を当て、「名もなき人々」に歴史を語り直す権利を再分配する実践と見ることができる。

しかし小牧氏は、この展示を単純に「誠実な歴史修正」と評価することには躊躇を示した。展示全体をたどると、パキスタン側からインドへ移動したヒンドゥー教徒やシク教徒が苦難を乗り越え、最終的にインドで生活を再建したという「希望」と「成功」の物語へと収斂していく。そのため、地域や個人の多様な経験を扱いながらも、最終的にはインドのナショナル・ヒストリーを肯定する構造になっていると小牧氏は指摘した。この点は、小牧氏自身がインド・パキスタンのムスリム社会を研究してきたことと密接に関わる。インドの多数派であるヒンドゥー教徒や、避難民としてのシク教徒の立場から見れば、同館の展示は感動的で説得力ある「歴史修正」として受け止められうる。しかしムスリム側から見れば、分離独立に伴う暴力が一方的に語られ、パキスタンやムスリムが暗黙のうちに加害者として配置されているようにも映る。つまり、同じ展示であっても、来館者がマジョリティとマイノリティのどちらに位置するかによって、その「誠実さ」や「ケア」の意味は大きく変わり

うるのである。ここから小牧氏は、本書で紹介される欧米の展示についても、それらの多くが「マジョリティ側がマイノリティの視点を取り入れる」形式になっているのではないかと問いかけた。そして、制度的な多数派の側から多様性を包摂するのではなく、実際にマイノリティの位置から既存の歴史認識へ挑戦するような展示は可能なのかと問う。インドでムスリム側から分離独立を描くミュージアムを設立することの困難さを例に挙げながら、歴史修正とナショナリズムとの密接な関係は日本に限らず、インド・パキスタンにも存在すると指摘した。

第二の事例として取り上げられたのは、マンチェスター大学のウィットワース美術館で開催されたムスリム女性アーティストの展覧会である。この展示は、メディアによって固定化されてきたムスリム女性像を問い直し、五人の女性アーティスト自身の声を通じて、より複雑なアイデンティティや経験を提示することを目的としていた。ところが小牧氏が注目したのは、展覧会全体を方向づけるキュレーションと、個々のアーティスト自身の語りとの間に生じていた「ズレ」である。展覧会の趣旨は「信仰を越える」ことを前面に掲げていた一方、実際のアーティストたちは信仰や民族的ルーツを捨てたり超えたりするのではなく、それらを大切にしながらイギリスで生きることを語っていた。この不一致から、誰が誰の経験をどのような物語として配置しているのかという、キュレーションそのものの権力性が浮かび上がる。

小牧氏はさらに、近年のミュージアムにおいて「言葉」が展示物そのものよりも強い力をもちすぎているのではないかと問題提起した。キュレーターによる詳細な説明や物語化は、展示の背景を理解させる一方で、来館者に特定の読み方や感情を促す装置ともなりうる。来館者にはそれぞれ異なる経験や来館目的があり、必ずしもキュレーターの物語に共鳴するとは限らない。とりわけマイノリティの立場から展示を見る者にとっては、善意によるキュレーションであっても反感や違和感を生む可能性がある。その対照として、小牧氏は英国国教会の総本山であるカンタベリー大聖堂で見た「言葉もモノもない」空間を紹介した。かつてカトリックの聖遺物が存在した場所に、説明パネルも展示物もなく、一本の蝋燭だけが灯されている。その不在そのものが歴史を語りうる経験から、小牧氏は、ミュージアムはどこまで言葉に依存する必要があるのかと問いかけた。

最終的に提示されたのは、「人の力を信じるミュージアムは可能か」という問いである。来館者をキュレーションの意図どおりに学習させようとするとき、そこには来館者の解釈能力を十分に信頼していない態度が潜んでいるのではないか。歴史を「みんなで修正する」のであれば、共有されるべきなのは歴史を語る権威だけではなく、展示を受け取り、解釈し、時にはそこから逸脱する権利でもあるのではないか。小牧氏の報告は、本書の「歴史修正」を、誰が正しい歴史を語るのかという問題だけでなく、誰の位置から「修正」が経験されるのか、そしてキュレーターと来館者のあいだで権威をどこまで共有できるのかという問いへと開くものであった。

小森真樹氏からのリプライ

徳原・小牧両氏からのコメントを受け、小森氏はまず徳原が提示した「修正は制度の外部から起こるのか、それとも制度内部からも起こりうるのか」という問い、および修正を可能にする制度的条件について応答した。小森氏は、台湾の事例がこの問いを考える重要な材料になるとした。台湾では、民主化後に「台湾人とは何か」「台湾のナショナル・ヒストリーとは何か」という問い自体が現在進行形の課題となっている。そのため、村の歴史や先住民の歴史を語るローカルな実践も、単に国家の歴史に対抗するものではなく、「台湾人の歴史」を作るプロジェクトと結びつきうる。歴史を語る行為は、社会的・政治的な条件から切り離された中立的な営みではなく、それぞれの歴史的構造のなかに必然的に巻き込まれていると小森氏は述べた。したがって、「制度内部か外部か」を単純な二項対立として捉えることに

は慎重であるべきだという。例として小森氏は、近年開館した鳥取県立美術館と、その周辺で以前から本屋、映画館、ギャラリー、ゲストハウスなどを営んできた草の根の文化活動との関係を挙げた。公立美術館という制度が地域にすでに存在している文化的リソースを拾い上げ、互いにつなぐことができれば、それまで歴史として語られなかった活動を可視化する装置にもなりうる。ここでは制度と草の根活動は明確に分離されているのではなく、人々が複数のモードを行き来しながら混然一体となって活動している。その意味で重要なのは「内か外か」ではなく、それぞれの条件のもとで活動がどのように意味づけられ、接続されるのかを捉えることだとした。

さらに小森氏は、「歴史修正」という概念そのものについても補足をした。本書では、否定論的な歴史修正主義に対抗して、「歴史修正」という言葉を本来的な意味へと取り戻すことを意図的に掲げた。しかし、本書で用いた「誠実な修正／不誠実な修正」という区別については、自身も問題を感じているという。「誠実」という倫理的な基準では、たとえばトランプ支持者のように、自分たちこそ誠実だと信じている集団を分析できない。そのため、その後の論考では「是正としての修正」と「反動としての修正」という区別を試み、価値判断を先に置くのではなく、それぞれがどのような社会的・政治的文脈から生じるのかを捉えようとしていると説明した。その際、小森氏が重視するのが「情動」である。人々がある歴史に参加し、「われわれ」という集団への帰属意識を形成するとき、それを合理的なイデオロギーだけから説明することはできない。是正的な修正も、それに対する反動も、人々の感情や帰属意識を動員する。したがって「修正」という概念を、善い歴史／悪い歴史という区分ではなく、「われわれ」をめぐる情動的な競合のプロセスとして捉え直すことで、概念をより有効にできるのではないかとした。

続いて小牧氏からの問いに対しては、マジョリティから見れば「修正」であって、マイノリティから見れば抑圧として経験されうるという指摘を受け、本書ではあえて取り上げなかったラディカルなミュージアムの事例を紹介した。ニューヨークのMuseum of Reclaimed Urban Spaceは、ロウアー・イースト・サイドのジェントリフィケーションによって居場所を奪われてきた住民と、その抵抗運動の歴史を伝える小規模な施設である。公的ミュージアムではスポンサーや都市の権力関係ゆえに語りにくい内容をきわめてラディカルに提示している一方、小森氏は、本書全体では「みんな」や共生を考えるため、あえてこうした事例を中心には据えなかったと説明した。つまり、本書で取り上げる事例そのものも、著者による一種のキュレーションとして選択されているのである。

最後に、小牧氏が提起した「言葉とモノ」の問題について、小森氏は、キュレーションが特定の物語を強く与えてしまう危険を認めつつ、展示というメディアが複数の矛盾を同時に存在させられる点に可能性を見いだした。言葉による説明、モノ、映像、空間、インスタレーションが併存することで、一つの正解に収斂しない複数の読みが生まれうる。小牧氏が例に挙げたカンタベリー大聖堂の「不在」の展示も、言葉では政治的摩擦を生みうる過去を、一本の蝋燭と空間によって示す例として評価された。また、来館者は必ずしもキュレーターの意図どおりに展示を読むわけではない。テキストとは異なるサブテキストを読み取ることもあり、展示は複数の意味のレイヤーを共存させることができる。小森氏は、この「矛盾を消さずに置いておける」ことこそ、展覧会やミュージアムというメディアの重要な可能性ではないかと応答した。

以上のリプライを通じて、小森氏は「修正」を固定的な価値判断として定義するのではなく、異なる制度、立場、情動、メディアのなかで絶えず意味が変化するプロセスとして捉えようとした。制度の内外、是正と反動、キュレーターと来館者、言葉とモノ——それぞれを単純に二分するのではなく、その境界がいかに関渉され、矛盾を抱えながら共存しているのかを考えることが、むしろ「みんなで修正する」ことの条件なのだという方向へ議論は展開した。

全体討論

小森氏によるリプライの後、会場およびオンライン参加者を交えた全体討論が行われた。討論では、本書の中心概念である「修正」の意味を改めて問い直す議論を軸に、コミュニティ・ミュージアムと制度、社会の安定性と公共性、さらに「オルタナティブ」という言葉の政治性などへと論点が広がった。

1. 「修正」は結果なのか、意図なのか

最初にコミュニティ・ミュージアムについての問いとともに、「修正」という概念そのものをどのように定義するのかという問題が提起された。すべての展示は、それ以前の歴史像に何らかの変化を加える以上、結果的には「修正」と呼びうるのではないか。それとも、既存の歴史を能動的に変えようとする意図がある場合だけを修正と呼ぶのか。さらに「修正」が成功したとき、それまでの公式的な歴史が新しい歴史によって置き換えられることが目標なのかという問いである。

これに対して小森氏は、一つの語りが別の語りによって上書きされることよりも、複数の語りが可視化され、社会のなかで参照可能な状態になることを重視すると答えた。過去の差別的・抑圧的な語りについても、それを単に消去するのではなく、現在の批判的な文脈とともに見える形で残すことには意味がある。語りを隠すことが、かえって否定論を増幅させる可能性もあるためである。ミュージアムは、異なる語りを共存させる制度となりうるという。また小森氏は、「修正」を意図的な実践だけに限定することにも慎重な姿勢を示した。特に日本のミュージアムでは、キュレーター自身が強いメッセージを発しているという自覚をもたないまま、ある特定の歴史像が構成されている場合も多い。したがって、明示的な「修正」の意図がなくても、展示がどのような歴史像を作っているのかを読み込むこと自体が、パブリックヒストリアンやミュージアム研究者の重要な仕事になるとした。

2. コミュニティ・ミュージアムは何を「修正」するのか

さらに、一人の個人や地域住民、自治会などが担うコミュニティ・ミュージアムと、国や自治体による大規模なミュージアムとの違いを問い、ローカルな歴史の蓄積そのものがナショナル・ヒストリーを相対化しうるのではないかと指摘もあった。

小森氏は、ニューヨークのMuseum of Reclaimed Urban Spaceを再び例に挙げ、コミュニティ・ミュージアムでは「場所」の存在そのものが運動と記憶を継続させる拠点となりうると応答した。メンバーが入れ替わり、地域住民が移動していても、空間が残ることで長期にわたる社会運動や地域の記憶が保持される。その点は、行政から与えられる財政的安定とは異なる、コミュニティ・ミュージアム固有の力として捉えることができる。ここで前半の台湾や鳥取の議論ともつながり、ローカルとナショナル、制度とコミュニティを明確に分けるのではなく、それぞれの歴史実践が異なるスケールで接続されていくこと自体が重要な問題として浮かび上がった。

3. 「みんなで修正する」ことが可能な社会とは

続いて、シンガポールのように国家が歴史展示を強く統御している社会では、「みんなで修正する」という理念はどこまで可能なのかという問いが提示された。多民族・多言語社会であるシンガポールでは、国民統合や経済発展という国家的目標のもとで歴史の語りが慎重にキュレーションされており、自由な歴史実践が民族間対立などを再燃させることへの警戒も存在するのではないか。社会そのものを脆弱だと国家が認識している場合、欧米の安定した社会を前提とした参加型の歴史実践とは異なる条件が生じるという問題提起であった。

これに関連して、ミュージアムを「保存する＝conserveする」制度として捉え直す視点も提示された。地域の空襲資料館などを念頭に置けば、ミュージアムとは本来的に記憶や資料を保存するという意味で「conservative」な制度である。しかしそれは政治的な保守

主義と同義ではなく、むしろ歴史を再検討しながら保存していく「開放的な保存主義」とも考えられるのではないかとした。他方、紛争が続き、そもそも何を保存すべきかについて社会的合意が形成されにくい場所では、この種のミュージアム自体が成立しにくい可能性も指摘された。

小森氏も、同じ「ミュージアム」という名称をもつ施設であっても、その機能は地域や政治体制によって大きく異なることを認めた。本書は主として自身が調査した欧米の事例を扱ったものであり、そのモデルをそのまま普遍化するのではなく、今後は非西洋圏を含め、それぞれの地域においてミュージアムが何を意味するのかを比較する必要があると応答した。

4. 「修正」と「オルタナティブ」を誰が奪い返すのか

本書の英語タイトルに用いられた “alternative histories” という表現についての質問も出た。「revision」や「revisionism」といった歴史学の語彙とは異なり、“alternative” は、ポスト・トゥルース以後の英米圏における “alternative facts” をも想起させる。この言葉をあえて使用したことに、どのような意図があるのかが問われた。

小森氏は、まさに “alternative facts” を意識した表現であると答えた。ポスト・トゥルース的な政治状況では、「別の事実」「別の歴史」という言葉が否定論の側から積極的に利用されている。そこで、本書の日本語タイトルで「歴史修正」という言葉をあえて用いたのと同様に、“alternative” という言葉についても、否定論に独占させず別の仕方でも用い直すことを意図したという。英語で “revisionism” とすると別の誤解を招く可能性があるため、“alternative histories” という表現によって、言葉の意味そのものをめぐる政治的な争いを示そうとしたと説明した。このやり取りによって、書評会の冒頭から繰り返し論じられてきた「修正」という言葉の問題は、単なる用語の定義ではなく、誰が言葉を所有し、その意味を決めるのかというヘゲモニーの問題へと再び戻ることになった。

そのほかにも、本書でも扱われたマンチェスターにある公共トイレの再利用に関連して、公共施設と公共性をめぐる質問も出された。小森氏は、公共トイレが近代社会において誰を「公共」に含むのかを可視化してきた施設であり、ジェンダーなどの社会的規範を読み取ることのできる場所であると指摘した。さらに、古い公共トイレが別用途へ転用される現在のあり方も、社会が公共空間をいかに再定義するかを見る素材となると応答した。

全体討論を通じて、「歴史修正」という概念は、異なる語りを共存させること、意図されていない歴史実践をも批判的に読み取ること、地域や政治体制によって異なる制度条件を考えること、そして「修正」や「オルタナティブ」といった言葉そのものを誰が使用するのかを問い続けることが重要であることが確認された。

（文責：徳原・兎澤）

■ 寄稿募集（随時）

本Newsletterでは、日本内外のパブリックヒストリーに関わる**実践・研究**を継続的に紹介し、領域の進展に寄与することを目指します。

寄稿いただける方は、**200字程度のアブストラクト**を添えて、媒体を問わず（**テキスト／映像／音声／図画**など歓迎）お送りください。掲載可否や体裁は編集委員会で調整のうえご連絡します。

【寄稿送付先】 phjpnewsletter@gmail.com

【記載事項】 お名前・ご所属／アブスト（200字）／想定掲載形式（テキスト・画像・動画・音声 等）／ご連絡先

■ 研究会活動

今後予定されている研究会の活動は以下の通りです。

第2回パブリックヒストリー研究会公開研究会

日時：2026年10月3日（土）10時～17時（予定）

会場：慶應義塾大学三田キャンパス 研究室棟1階 会議室

現在以下の要領で報告者を公募しております。報告を希望の方は奮ってお申込みください。

報告資格：パブリックヒストリー研究会会員（非会員の方で、報告者として採択時には、会員としてご入会をお願いいたします。会費は2,000円/年です。）

報告内容：パブリックヒストリーにかかわる内容であること。その他詳細は問いません。

報告時間：報告20分、質疑10分の計30分を予定

遵守事項：報告者（参加者も含む）はパブリックヒストリー研究会倫理規範を遵守してください。これに抵触する行為を行った方は即時報告の停止と退場を求めるとともに、当研究会からも退会していただきます。また、その際は、当研究会は当該報告者および参加者に対して、会費の返却は行いません。

なお、報告申込多数の場合はパブリックヒストリー研究会運営委員会で審査、調整いたします。採択報告者数は最大9名を予定しております。

資料投影が必要な報告者は各自PCをご持参ください。会場はWi-Fi接続が可能です。

採択スケジュール

報告受付開始 2026年7月中旬

報告受付締切 2026年8月31日 → 2026年9月7日 ※延長しました

報告採択者への通知 2026年9月上旬

研究会当日 2026年10月3日（土）

投稿フォーム

投稿をご希望の方はこちらのフォームからご投稿ください。

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSe10GLi409HeYr8MOC3Ux16xyJVJaQrTtVK0n5SeVYasPWSGQ/viewform>

2026年9月7日受付締切です。（8月31日から1週間延長しました。）

最新の情報は研究会HPでもご確認いただけます。

■ お問い合わせ

パブリックヒストリー研究会 Newsletter編集委員 徳原・兎澤

E-mail：phjpnewsletter@gmail.com

Web：<https://public-history9.webnode.jp>

今後とも、研究会の活動へのご支援・ご参加をよろしくお願い申し上げます。

パブリックヒストリー研究会 Newsletter編集委員／運営委員一同